

〈研究会発表要旨〉

大分方言の新傾向と方言意識

松田美香 (短期大学部講師)

1997年・1998年と別府大学短期大学部の学生を対象に、方言についての意識 (イメージ) やいくつかの言語表現使用の有無をアンケート調査し、大分県、また周辺の県の新しい方言現象の傾向をとらえようとした。

アンケートの結果、大分県出身者244人は、地元のことばを「好き」が40.6% (99人)、「味がある」17.2% (42人)、「深みがある」9.4% (23人)、「はっきりしている」8.6% (21人)と評価した。しかし一方で、「下品」27.0% (66人)、「きたない」25.8% (63人)、「荒々しい」25.4% (62人)と品格・知性は無いというイメージを持っている人も多いことがわかった。大分県出身者の好意が特に寄せられたのは、福岡弁32.8% (86人)・関西弁55.4% (136人)といった大都市のことばであった。東京に対しては好き嫌いが同数。

今回の結果からは、「優しさ・柔らかさ・上品さ」を福岡弁に求め、「歯切れの良さ (はっきりしている)・おもしろさ (味がある)」を関西弁に求め、「丁寧さ・上品さ・教養・正しさ」を共通語に求めている、大分県出身者の都市言語への憧憬が読みとれる。特に福岡・大阪・東京という都市イメージの影響が強く感じられる。今後、地元のことばを認めながらも、関西 (おもに大阪) と福岡のことばを積極的に受け入れていくことが予想される。一方、県外

出身の学生105人の大分方言への意識は、県内出身者のものとよく似ていたが、少数ながら「優しい」5.7% (6人)、「やわらかい」(6人)という人もいた。

具体的な方言現象としていくつかの変化が見られる。まず、「昨日は雨だった」の下線部 (断定辞) がジャッタからヤッタへ変化している。85.2% (208人) が「ヤ」を「よく使う」と答えたのに対して、「ジャ」の使用者は、「よく使う」(1人)、「たまに使う」(17人) だけだった。これは関西地方の「ヤ」が浸透している。ということである。次に「～してください」の敬語表現である「～(ラ)レてください」(例、保険証を持ってこられてください) という「ラレル敬語」が使用され始めている。この言い方を「地元大分のことば」と答えた人は24.6% (60人)。その他に、福岡・関西の言葉だと答えた人10.2% (25人) もいた。また、見ラン、出ランなど、一段活用動詞のラ行五段活用化も進んでいる。2拍動詞は平均93%もの割合で否定形にラを挿入する。起きラン、落ちランなど、多拍動詞にもこの傾向は及んでいて、やがて一段活用はなくなり、五段活用に統合されそうである。この現象は、福岡よりも熊本・宮崎・佐賀・長崎出身の学生の方が顕著である。大分方言を変化させる要素は、大都市の影響ばかりではないようだ。